

日時：令和6年3月26日（火）

午後4時30分～6時

会場：荘銀タクト鶴岡 小ホール

[出席者]

委員：草加叔也氏（会長）、太下義之氏（副会長）、白幡徳明氏、渡部真喜氏、兼子由香氏

事務局：【鶴岡市教育委員会】布川敦教育長、永壽祥司教育部長、沼沢紀恵社会教育課長、
熊坂めぐみ社会教育課主幹、石川誠芸術文化主査、
梅津夕子芸術文化係専門員、渡邊雅之芸術文化係専門員

【指定管理者（タクトつるおか共同企業体）】

有地裕之開発公社常務理事、押切良輔開発公社次長、
榊原賢一芸術文化協会事務局長、水戸雅彦文化会館コーディネーター、
佐藤潤到文化会館事務長、高橋正展文化会館主査、
伊藤玲子文化会館係長

[公開・非公開の別] 公開 傍聴6名

1 開 会（社会教育課長）

2 挨拶（教育長・会長）

3 協議

（1）令和5年度事業報告について

（2）令和6年度事業計画（案）について

事務局より資料説明：資料1、2

会長：はじめに、令和5年度事業報告について、委員の皆様から質問・意見を伺う。

委員：盛りだくさんの事業をされていてすごいと思った。特によかったと感じたのはのど自慢で、Iターンの方の交流の場にもなったと聞く。私の周りにもIターンやUターンの方がおり、皆さん地域の方との交流を求めているが、なかなかそういう場がない。のど自慢大会が交流の場になったようで素晴らしい。これからもそういう事業があるとよいと思う。

委員：鑑賞事業6件のうち4件、参加体験事業3件のうち、ピアノリレーコンサートの公演サポートをした。資料11ページの初の鑑賞サポート事業について、難聴者の方の付き添いをしながらの公演ということで初めての試みであった。サポートするにあたり、2日前にサポートの仕方を講師から学んだ。日ごろ接するのは障害を持っている方は少ないので、勉強になり、当日サポートする上で心強かった。のど自慢は、10日の本選のみサポートした。6年前にもサポートしたが、今回の観覧希望の倍率は6年ぶりの生放送ということで11倍と前回より高く、関心を持っている方が多いと感じた。当日観覧は全席指定なのでそんなに混雑もなく、スムーズにできた。いつもと違う熱気が会場からサポーターの人たちにも伝わってきて、いつも以上に盛り上がったと感じる。事業が盛りだくさんの1年だったが、公演サポートをさせてもらい、やりがいを感じている。

委員：事業報告をみて、本当に多くの事業をしており、また、いろんな方々が参加できるものがたくさんあると感じている。鑑賞サポートは、障害を持つ方も公演鑑賞ができるということで、サポートの仕方が分からないと難しいことだと思うが、研修を受けてサポートしていただいていることは素晴らしい。これがどんどん広がり、いろいろな人が参加できるようになると、さらに多くの人々がタクトに来るようになると思う。タクトでの宝さがし大会は、舞台での公演だけではなく、小さな子どもが会館を楽しむことができる事業、そして高校生がボランティアとして参加しているということで、世代を超えた交流ができる場として有意義である。誰かにどこかに偏ることなく、いろいろな人が来れる、そしていろいろなことが体験できる場所になっていると感じている。

委員：タクトは報告を聞くたび、毎回面白い事業をしていると思う。宝さがし大会やガチャ、おとアートのような全館を使った企画やオールナイトカモスイが挙げられる。それから一見地味だが、実はすごくいい事業だと思うのが閉館BGMの一般公募である。よくやっているなという印象であるが、数限られたスタッフなので、燃え尽き症候群にならないようにがんばっていただきたい。

会長：個人的には、コロナウイルスが落ち着いてきたことを実感できるプログラムになっているように思った。事業が滞りなく進んだことと、集客数も開館時に迫るぐらいまで戻りつつあることは、劇場にとって一番の本来の使命を果たしていると思う。それから、いくつか段々とタクトらしい、定期的に行われる事業というのもみえるようになってきたので、継続性という点からもよいと思う。閉館お知らせBGMは、市民が参加できるチャンスがあるというのがよいと思う。事業というより、運営への参加ができるという工夫も面白いと感じた。

会長：引き続き、令和6年度事業計画への期待や意見等を伺う。

委員：多彩な事業を行うようなので、鶴岡に住む一市民としてもとても嬉しく思う。課題としては、前回も話をしたが、もっと多くの方に届ける広報発信がより大事になってくると思う。素晴らしい事業や場があることを鶴岡市民やより多くの方に広報発信することに力を入れていただければと思う。タクトのXやインスタグラムを見たが定期的に配信されており、おしゃれな写真もあった。先日広報を学ぶ機会があり、継続的に発信することがとても大事だそうなので、力を入れていくとよいと思う。

委員：開館時から実施した事業をまとめた資料を見ると、開館当初からだいぶ事業が多くなった。コロナの時期に減るのは当たり前だと思うが、表になったものを見るとすごいと思う。サポーターとして携わっていると、開館当初から行って、楽しいからなくさないと言われる事業がある。例えば、ピアノリレーコンサートは、ピアノに限らず、いろんな楽器を演奏する方がいて、親子での出演や学生など、幅広い方たちが出演している。出演者の関係者、ご家族が来て、席も自由なので和気あいあいとしていい事業だと思っている。今年度新しい試みもあったが、新しい事業をするときは準備などいろいろ

なことが大変だと職員の方から聞くし、そう感じる。私たちは、公演サポーターということで、自分が都合の良い時に参加しているが、公演するにあたっての職員の労力は大変なものだと思う。令和6年度も盛りだくさんで、6つの基本方針を基に、事業を組む時に大変だったであろうと思う。先ほどの委員もおっしゃった通り、PRも大切になってくると思う。鶴岡だけでなく、酒田の公共施設でタクトしんぶんを見たこともある。職員の方たちも幅広くPRするため、紙媒体やネットなどを利用してPRするなど、いろいろなことを考えながら活動していると実感した。

委員：来年度の様々な事業の中には、もう定着してきているものもたくさんあると思う。それを楽しみにしている方もいると思うし、新たな取り組みもあり、職員の皆さんの努力や工夫が見られ、どんどん幅広い方々から来ていただけるものと思う。先ほどからあるように、口コミなどが人を呼び込む大きな力になるので、SNSを活用して発信しながら進めていくことが大事だと思う。継続するのは大変だと思うが、持続可能な事業になっていけばよいと思う。

委員：令和6年度にコーディネーターが参画されるということで、新たな展開にぜひ期待したい。

会長：資料6ページに「地域創造」と書いてあるが、こういう財団からの助成や協力をいただいて事業をやっていくことも、館にとっては非常に重要なことだと思う。また、同じ催し物でも、子ども向けやもう少しクラシックファン向けなど、いろいろなバリエーションを持って事業を組み立てていて、こういう点も工夫されていると感じた。それから、タクトは定期休館日がない施設で、今後労務管理が大変になっていくと思うので、その辺も工夫をしていただきたい。労務管理にも関わってくるが、職員の方が退職をされ、ご苦労があると思う。現在、人員の補充の予定など、どのような状況か教えていただきたい。もう一点、資料7ページの令和6年度自主事業一覧をみると、主催事業が18事業、それ以外に共催事業が7事業ほどある。いろいろな事業を増やしていく工夫の一つとして共催の方法があるが、そのやり方と苦労があれば伺いたい。

事務局：労務管理ということで、職員が12月で退職した。ハードな業務をこなしてもらいありがたかったが退職され残念である。新たな職員の募集をしたが実現できず、内部昇格で対応している。また、職員2名が年度末まで退職予定である。実際これまでもタクトの人員はかなり入れ替わりがある。会長が言うように、定休日がなく、まとまった休みが取りづらい。しかも早番、遅番、夜番と3交代の勤務になっているため、特に若い人は土日休みの人とスケジュールを合わせるできないのではないかなと思う。また、業務内容もこれだけの事業量で負担になっていると感じている。待遇面や給与等で将来を見据えた人生設計をする際に、このまま続けていっていいのかと不安があるのも実情である。職員補充の関係は、芸文協と開発公社で採用をしているが、現在は欠員の状況にある。

事務局：開館当初から比べると、共催を増やしてきた流れがある。主催はこちらで手配諸々全て行い労力がかかるが、共催はそこから少し共催条件を提供して、ここでやるに相応しいものとして双方で協議して成立したものである。当初、開館から間もないこともあり、是が非でもということで、よい条件を提供してやってきた経緯があるため、事業を増やすにあたって、負担にならない形で共催にうまく移行することができず、主催のように行っているのが現状である。こちらの負担にならない形で行うにはどうしたらよいか、システムの問題や開館からの経緯もあり、すぐに条件を変えるところまで持っていくことができていない。説明しながら徐々に共催の条件をこちらに負担がかからないように提供している最中である。それによって事業の本数を増やしていけると思うが、事業を選ぶにあたり、双方win×winな条件で成立するまでには至っていない、現在取り組んでいる最中である。

会長：組織というのはこの劇場を動かしていくエンジンになるので、負担のないように、それから欠員があるということであれば、そこを早期に対応できるように考えていただければと思う。職員が幸せにならないと、来られるお客様も幸せになれないかもしれないので、両方が幸せになるような組織にしてもらえたらと思う。それから事業に関して、共催は事業数を増やす1つの手段だと思う。今までのやり方があるのかもしれないが、手段が逆に作業量を余計に増やすということにならないよう、今後に向けてモデルをもう一度見直し、工夫をする必要があると思う。

(3) 今後の事業運営について

事務局より資料説明：資料3

会長：今後の事業運営について、委員の皆様から質問・意見を伺う。。

委員：タクトなどの劇場は鑑賞するだけの場というイメージが強かったが、鑑賞するだけではなく、交流の場や発信の場、創造の場になるというのは素晴らしい基本方針だと感じる。ぜひ今後も観るだけではなく、創造や発信の場になってほしい。文化芸術は非常に幅広く、事業にもあるダンスやJ-POPや落語の他に、身近なところでは漫画やアニメーションなど、東京や仙台などではたくさんあるが、この地域ではやっていないこともあると思う。そういうものにも焦点を当て、都会に行かなくても地元で文化芸術を楽しむようになるとういと思う。

委員：とても素晴らしくまとめられた内容だが、新しい事業展開をする上で、一度にいろいろなことをすると大変なので、焦らず、あまり肩に力を入れず、できることからひとつひとつやっていくのがよいと思う。一番大切なことは職員の笑顔だと思う。市民サポーターとして、接客、お辞儀の仕方、クレーム対応など、様々な分野にわたり講習を受けているが、市民サポーターがプロを目指す意識でやりなさいと先生から言われている。その中で一番言われることはやはり笑顔である。特別な時間、空間、非日常を求めて訪れる方が多いので、職員やスタッフに笑顔がないとお客様も心の底から笑えないと常々言われている。今でさえ職員の皆さんとても多くの仕事をしていると思うので、まずは一歩一歩だと思う。

委員：一市民として、文化会館とどう付き合っていたかと考えると、会館の人が何かをしてくれて、それに受け身で参加していた。会館で何かイベントをしてくれないと「何でしてくれないんだろう」という気持ちになってしまっていた。運営委員会に参加し、多くの事業を展開していることが分かり、市民として、自分が参加するんだという主体的な気持ちになるようにしていけないと感じた。参加型、体験型のイベントをたくさん展開しているので、どんどん参加して、そして自分たちも創るんだという気持ちになれたらいいと思う。また、参加してもらえるように主体的に発信をしていかなければいけないと思う。自分も運営委員の一人として、まずは高校生、そしていろいろな人に伝えていきたい。

委員：コーディネーターから説明いただいたコンセプトに賛成である。先ほど、劇場は鑑賞する場だと思っていたという話があったが、コーディネーターからもご紹介あった劇場法という法律の前文では、劇場というのは市民の新しい広場だと書かれている。私も法律を作る時に検討委員だったので印象深い。タクトロノミーで示されているような多様な方向性というものを目指してもらいたいと当初から思っていた。一方で、人員体制をみると中々そういうことを言い出せないでいたが、タクトの運営も安定してきたことが数

字としても出てきたので、4月からの新年度は、タクト ver.2 という新しい時期に入ったという認識の下、すぐにはできないかもしれないが、人員体制を固めていく中で新しい方向性にもチャレンジしていただきたい。

会長：資料に開館からの年度別事業一覧が載っており、事業数は増えているが、事業数は単に増やせばよいということではなく、労務管理の問題もあるので、その中で実現していかないといけない。コロナがあったので一度事業数は減っているが、そうでなければ最初からフルスロットルでやっていたのかもしれない。これも今後、事業をどう精査していくのかということも必要である。それから、なるべく体力を使わないで事業数を増やしていくという意味で、共催を活用していくことも必要だと思う。コーディネーターから提案あった考え方というのは理想的にはすごく重要ことだと思うので、もう一度こういうことも考えていただくとともに、今のタクトの現実との距離をどう埋めていくのか、工夫があるところだと思う。望ましい理念と現実とをどうマッチングさせていくのか、ぜひ運営委員の皆さんも含めて議論ができるようにしていくことが必要である。このことを市民の方々からもご理解いただいて、この施設がどういう位置づけの施設であるのか、ただただ鑑賞する場なのか。コーディネーターの言葉を使うと、消費する文化芸術から創造する文化芸術へ。お金を払えば、観て聴いて楽しかった、だけで終わるのではなく、それが鶴岡の価値として根付くような仕掛けをしっかりと作っていく。その仕組みを劇場が作っていくことがとても重要であるということを改めて認識した。この辺をもう一度立ち返って、管理運営計画だけではなくて、こういうことも考えていかないといけないということを共有できればと思う。

委員：先ほどコーディネーターが提示されたタクトロノミーに、アート×たくさんの方向性があるが、鶴岡の場合はここからほど近いところに社会福祉協議会もあるので、福祉×アートという方向性をつくっていただければと思う。今日の報告書にも既にこういう取り組みが紹介されているが、世の中の福祉の取り組みはもっともっと進んでいる。障害のある方の取り組み紹介であるが、今はより包摂的になっているので、そういうところも睨んで取り組んでいただきたい。

会長：マイノリティという言葉は障害者だけの言葉ではなくて、生活困窮者もいるし、男女差別というものもあるし、外国人の問題だとか、先ほどコーディネーターが紹介された社会包摂的機能を作っていく、考えていくというのは、劇場にとって重要な課題であると思う。文化を語る上ではそういうことをしっかりと考えていかなければならない時代になっている。広く議論ができるようにしていければよいと思う。

4 そ の 他：特になし

5 閉 会：（社会教育課長）